
環境保全と人間活動の調和は可能か

— アフリカでのフィールド調査と地域開発支援の経験から —

田中 樹（京都大学・地球環境学堂）

1. 講義のねらい

「人間活動の増大により生態環境が悪化する」、あるいは、アフリカを例にとると「人口爆発により環境や資源が劣化し飢餓や貧困が引き起こされる」という言葉を聞いたことはありませんか？この講義では、アフリカでの地域開発支援や砂漠化対処に関するフィールド調査の経験をベースに、生態環境の保全や荒廃地修復と人間活動との関わりのある方を紹介します。講義全般を通じて、一般通念の再検証の必要性や逆転の発想の有効性を意識したメッセージを伝えます。

2. 講義の概要

「木を植えないで森をつくる」、「土壌を壊さずに火入れ（焼畑）をする」、「人口を増やしつつ焼畑が減り村全体を森のような雰囲気にする」、「何もしないで砂漠化を抑制しつつに作物生産量を増やす」と聞いたら多くの方々は眉唾だと思われるでしょう。講義では、このことが可能であることを、幾つかの例を挙げて説明します（例えば、以下のようなものです）。

木を植えないで森をつくる：私が活動したタンザニア東部の山村では、長年の農耕と野火により森林破壊が起こった土地がありました。森林再生には「植林」が定番になっていますが、必ずしも有効な方法ではありません。それは、「植林」しても森林破壊の原因を取り除いたことにはならないからです。森が消えつつあるのは、村人が暮らしを支えるために植生を焼き、薪炭材を採集し、農耕地を拡大してきたためです。また、手間ひまかけて植林しても、その恩恵を手にするのは何年も先になります。私が参加したプロジェクトでは養蜂を通じて植生の回復を試みました。養蜂により得られる蜂蜜と蜜ロウは、食材や薬用に使われ現金収入の一部にもなります（直接的インセンティブ）。このため、養蜂は作物栽培と同じ生業であるとみなされ、養蜂箱を設置した土地の周辺では焼畑による火入れや野火が起こらなくなります。その結果、草本や灌木が自然に生えてきて、いずれは林や森に変わります（間接的効果）。森林の再生は植林以外の方法でも可能なのです。

土壌を壊さずに火入れ（焼畑）をする：焼畑は植生や土壌破壊の原因であり、火は「貧者の斧」とも形容されます。間違っただけではありませんが、正しくありません。タンザニア南部で行なった実証試験では、炎を上げて火が燃えている間は、土壌の温度が逆に下がりました（信じますか？）。軽く積み上げた枯れ草や枯れ枝に土塊をのせて燃やすと、十分に熱いけれども土壌を壊さない温度が長時間続くことがわかりました。これを利用して土壌に埋没している雑草の種子や根きり虫を蒸し焼きにできます。使い方により、火は「賢者の斧」となります。

3. 参考図書

講義とは直接関係しませんが、外部者によるアフリカ支援を考えるときの参考になります。

勝俣誠：アフリカは本当に貧しいのかー西アフリカで考えたことー。朝日選書

服部正也：援助する国される国ーアフリカが成長するためにー。中央公論新社